

理論的構成法による中国人就学生用ソーシャル・サポート尺度の作成

教育心理学コース 邱 焱

Constructing a social support scale for Chinese students of Japanese language schools in Japan by theoretical constitution method

Qiu Yan

The purpose of the present study was to construct a social support scale for Chinese students at Japanese language schools in Japan. At first, by building on previous research it was presumed that the structure of social support was composed of two dimensions. One of the basic dimensions is area of support, which includes learning environment and living conditions. The other dimension is type of support, which includes 5 types such as material, mental, linguistic, directive, informational support. In the first study, 50 items of the social support for Chinese students were collected by interview. Then 6 Chinese students at Japanese language schools were asked to classify each of the 50 items into the area and the type of support. Though this way, all of the items were classified into two dimensions and the structure was confirmed. In the second study, questionnaires were conducted on 319 Chinese students at Japanese language schools. Base on the data, the α coefficients were calculated and the internal consistency of the social support scale was confirmed. In this manner, a social support scale for Chinese students at Japanese language schools in Japan, which consisted of two areas and five types with 50 items, was constructed.

目 次

- 1 問題と目的
- 2 調査 1：尺度項目の収集
 - A 目的
 - B 方法
 - C 結果
- 3 調査 2：各カテゴリーの内的整合性の検討
 - A 目的
 - B 方法
 - C 結果
- 4 考察
- 5 今後の課題

1 問題と目的

日本では日本語学校で学ぶ外国人学生は、大学・大学院で学ぶ留学生（以下「一般留学生」と略す）と異なる就学ビザを持ち、就学生¹⁾と呼ばれている。1983年に日本の文部省（現在の文部科学省）による「留学生10万人計画」が発表された後、就学生が大幅に増加し、中でも中国大陆出身者の割合が特に高い。例えば財団法人日本語教育振興協会（2007）²⁾の調査によると、1998年から2007年までの間の中国大陆出身の就学生の人数は7,345人～31,669人であり、在日就学生総

人数の46.3%～74.1%を占めている。

在日私費留学生の大部分は日本語学校で勉強してから大学や大学院等に進学するので、日本語学校の在学期間是在日留学の一段階として位置づけられる。このため、一般留学生と就学生には一定の類似点はあると考えられる。例えば岡・深田（1994）³⁾は、日本人との付き合いやすさや、日本人とのトラブルにおいては一般留学生と就学生の差はないと報告している。しかし、両者の違いも少なくない。まず、就学生の受け入れ制度から見ると、奨学金や交通機関などの学生割引、医療費の補助などにおいて優遇されていない点が多いのが事実である。次に、一般留学生と比べ、就学生は来日の初段階にあり、年齢が若い、日本語レベルが低い、進学に対するプレッシャーを背負うなどの不利な点も抱えている。実際、加賀美（1994）⁴⁾は就学生は大学受験の結果によって留学生としての在留資格が得られないなど、特有の心理的な不安を持っていると指摘している。岡・深田（1994）³⁾では、一般留学生の場合は就職・進路の問題に対する悩みが最も多いのに対して、就学生の場合は勉強上の問題やビザの問題に関する悩みが多いということが明らかになった。また、2004年5月筆者が日本語学校を卒業し日本の大学や大学院に在籍している中国人留学生18名にインタビューしたところ、全ての学生が大学に比べて日

本語学校段階でより多くのソーシャル・サポート（以下「SS」と略す）を必要としていることが分かった。これらによって、在日留学において就学生と一般留学生が直面している困難や問題には異なる面もあり、上述のように就学生固有の問題の存在を考えると、就学生には一般留学生に対するSSとは異なるものが求められていると推測できる。従って、就学生に対するSSは別途取り上げて検討する必要があると考えられるが、現状では彼らを対象とするSS研究は未だ進んでいない。そこで、本論文は就学生に対するSSに焦点を当てる。

SSを検討する際にその尺度は極めて重要なツールとなる。日本では日本人大学生を対象にしたSS尺度がいくつか作られている（嶋，1990；久田・千田・箕口，1989等）⁵⁾⁶⁾。さらに、周（1993）⁷⁾は外国人学生と日本人大学生には言語、対人関係、経済環境などの領域において適応度の差異があることを考慮し、中国系留学生用SS尺度を作成した。ただし、いずれの尺度も就学生を対象としておらず、日本人学生や一般留学生との相違点を考えると、就学生のSSを検討するためには、彼らに適用できる尺度を作成することが必要であろう。

また、SSの構造に関して周（1993）⁷⁾は、領域次元及びタイプ次元を組合せて2次元のSS尺度を想定した。先行研究の概念をまとめることによって、前者は研究、人間関係、情緒、環境・文化の4領域に、後者は物質的、心理的、指導的、情動的の4タイプに分類された。これにより、理論的に4領域×4タイプの2次元の構造を構成した。次に、周（1993）⁷⁾は質問紙調査と面接調査を行い、中国系留学生へのSSの内容を収集し、そこから集約した項目を11人の日本人大学院生の判定によって4領域と4タイプを組み合わせた16条件に分類した。そして、判定の一致率が80%という基準で項目を選別し、2次元のSS尺度を作成した。さらに、質問紙調査を行い各条件の α 係数を計算し、内的整合性を裏付けている。こうして作成された尺度は中国系留学生のSSを検討した先行研究で多く使用されており、一定の妥当性があると言えよう。

そこで本論文は周（1993）⁷⁾の理論的構成法を用い、中国人就学生用SS尺度を作成する。尺度を作成するに当たっては先行研究の問題点も検討し、次のように改善策を考えた。

第一に、異文化移行者のSS尺度としての特徴が不明確である。周（1993）⁷⁾ではSSのタイプとしては物質的、心理的、指導的、情動的の4タイプを取り上げ

ている。これらは普遍性のあるSSタイプであり、外国人学生を始めとする異文化移行者固有の特徴が独立したタイプとして含まれていない。このため、日本人学生に対するSS尺度と質的に類似しており、異文化移行者のSS尺度としては特徴が明確ではない。一方、異文化への移行者を対象とする研究では、言語的サポートの重要性がしばしば示唆されている。例えば上原（1988）⁸⁾は、330人の各国一般留学生に対して7領域にわたって在日留学における適応問題について質問した。その結果、言語領域で約半分の人に困難があることが分かった。姚・松原（1990）⁹⁾では、外国人留学生の生活ストレスは「言葉の問題」が「病気や死亡」に次いで2番目に多いと報告されている。韓国、中国大陸、台湾からの就学生を対象にした山崎（1994）¹⁰⁾では、就学生の日本語能力が高まるほど差別感が減少するという結果が報告されている。また、一般留学生を対象とした田中（2000）¹¹⁾は、外国人学生独特のサポートの尺度項目として「日本語サポート」を使用している。これらのことから、言語面での支援は一般留学生や就学生にとって極めて重要であると考えられる。そこで、本論文では「言語的サポート」を外国人学生に特有なサポートとして提案し、周（1993）⁷⁾のタイプ次元に1タイプを付け加え5つのタイプを設定する。

第二に、領域次元の妥当性に問題がある。周（1993）⁷⁾では4領域を取り上げているが、この内にはタイプ次元に属する概念と交絡して区別できないものもある。例えば両次元の下位概念としてそれぞれ「情緒的領域」と「心理的タイプ」が取り上げられている。前者は「怒り、悲しみ、悩み、いらいらといった不快な感情が生じたときのサポート」、後者は「悩みを共に考えて、理解を示してくれたり、個人を受容し、肯定し、評価してくれるような精神的、感情的なサポート」と定義されており、両者の区別が曖昧である。このため、領域次元がタイプ次元と別に独立していると考えにくい。一方、田中（2000）¹¹⁾では因子分析によって一般留学生に対するSSのタイプ（勉学サポート、日本語・日本文化サポート、相談・励ましサポート、一緒に楽しむ・出かけるサポート、物・金サポート、情報サポートの7タイプ）は「学業サポート」と「生活サポート」の2因子に分かれているという結果が得られている。これは一般留学生へのSSが「学業」と「生活」の2領域に分布していることを示している。就学生も日本語の習得や進学など学業における課題、及びアルバイト探しなど生活における課題を同時に抱え

ており、「勉学」と「生活」を彼らのサポートの領域とすることは妥当であろう。さらに、このように領域次元を捉えると、概念的にタイプ次元とはっきり区別でき、前述した周（1993）⁷⁾の問題点が解決できる。そこで、本論文ではSSの領域次元については「勉学」と「生活」の2領域を設定する。

第三に、2次元の構造を構成した際、その分類手続に問題がある。周（1993）⁷⁾では4領域×4タイプという視点から収集した項目を再び4領域×4タイプの枠組みに沿って分類をしている。この手法はトートロジーであるという批判を免れず、2次元の構造の妥当性についての疑いを避けられない。この問題点について本論文は2つの改善を試みる。まず、周（1993）⁷⁾の調査では領域とタイプ両方とも取り上げているのに対して、本論文の面接では領域次元の説明文は提示しないことにする。もし2次元の構造が妥当であれば、タイプだけで収集した内容は領域においても再分類できるはずである。逆にいえば、タイプによる内容だけでも2次元に分類できれば、SSが2次元の構造であるということは検証できるであろう。しかもこの方法を採れば、調査協力者がSSの内容だけに答えれば良いので、面接による負荷を軽減することもできる。次に、面接に提示するタイプだけでSSを総括的に捉えられない可能性を考慮して、本論文では5タイプの説明文に沿って質問するが、他のタイプのSSの有無も確認する。

以上により、本論文は先行研究の問題点を考慮した上で、SSを領域とタイプの2次元で捉え、2領域（勉学領域、生活領域）、5タイプ（物質的、心理的、指導的、情動的、言語的）及び領域とタイプを組合せた10条件を設定して、理論的構成法によって中国人就学生用SS尺度を作成する。

2 調査1：尺度項目の収集

A 目的

中国人就学生用SS尺度の項目を収集する。

B 方法

2004年4月から7月の4ヶ月にわたり中国人就学生に対するSS内容を収集するための半構造化面接を実施した。

調査協力者 中国人就学生に対するSSの内容を網羅するために、その受け手である就学生のみならず、提供者も調査協力者とした。詳細は表1の通りである。

表1 調査協力者の内訳

調査協力者	人数 (計59名)
① 日本語学校の就学生	15名
② 就学生を経験し現在日本の大学・大学院に在学している留学生	18名
③ 日本語学校の事務員・教師	22名
④ 就学生を支援している各団体のボランティア	4名

注：①と②の協力者はそれぞれ7校の日本語学校に、③の協力者は9校の大学に属している。

手続き 調査協力者には、就学生のサポート事例を収集する調査の趣旨や協力者の名前や学校名などを使用せず、個人情報に侵害しないことを説明した上で行った。面接においては、5種類のサポートの説明文を呈示した後、表1の①の調査協力者に対しては、サポートの種類ごとに「必要とするサポート」及び「受けたサポート」の事例を、②の調査協力者に対しては就学生時代を想起させて「必要とするサポート」及び「受けたサポート」の事例を、③と④の調査協力者に対しては就学生に「提供したサポート」の事例をそれぞれできるだけ多く回答してもらった。「必要とするサポート」については、「実際に与えられないためにあきらめてしまったものも含めて、留学生活で本当に必要だと思っているサポートである」という説明を、「受けたサポート」については、「求めているかどうかに関係せず、実際に受けたことがあるサポートである」という説明を加えた。また、面接では呈示した5種類のサポートは参考程度のものであることを強調し、それらに当てはまらないものの欄も設けた。面接に当たっては調査協力者の答えを筆記すると共に、必要に応じて面接の録音も行った。面接では回答時間の制限をしなかったが、1人につき約40分～60分であった。

サポートのタイプ 面接で取り上げた5タイプのサポートの説明は以下の通りである。これらはCaplan（1974）¹²⁾；Cobb（1976）¹³⁾；Kahn & Antonucci（1980）¹⁴⁾；Silver & Wortman（1980）¹⁵⁾；House（1981）¹⁶⁾；Shumaker & Brownell（1984）¹⁷⁾；Barrera（1986）¹⁸⁾；浦・南（1987）¹⁹⁾；Hobfoll & Stokes（1988）²⁰⁾；Vaux（1988）²¹⁾；和田（1988）²²⁾；嶋（1991）²³⁾；周（1993）⁷⁾；音山（1996）²⁴⁾；田中（2000）¹¹⁾を参考に、また就学生の実情を考慮して作成したものである。

物質的サポート お金や物を貸してくれるといった物

質的な助力や、困った時に手伝ってくれるといった労力的な助力を指す（例：本、ノートなど、勉強のための道具を貸してくれる）。

心理的サポート 自分の悩みについて一緒に考えて理解を示してくれたり、励ましてくれたりするような精神的な助力を指す（例：就学生の悩みを聞いてくれる）。

指導的サポート 勉学領域と生活領域における指示、提案、指導、助言などの助力を指す（例：勉強の内容や方法、ごみの捨て方などの生活上のルールについて指導してくれる）。

情動的サポート 資料や情報の提供、連絡や伝言をしてくれるといった助力を指す（例：就学生に対するアルバイト、奨学金、活動などの情報を提供してくれる）。

言語的サポート 分からないことを中国語あるいは簡単な言葉で説明したり、日本語で伝えられないことを理解して自分の代わりに他人に伝えるといった言語上の助力を指す（例：就学生の代わりにアルバイトの求人先に電話してくれる）。

C 結果

以上の面接で1389個の回答が得られた。同一内容あるいは類似した内容を同一項目に集約したところ、50項目が得られた。

次に、日本語学校の卒業生10人（男性5人、女性5人）を判定者とし5タイプと2領域の説明文を読んで理解させ、50項目をタイプと領域別に分類させた。5タイプについては、各事例を用い事前練習も行った。また、5タイプと2領域に当てはまらないものがある可能性を考慮し、「どれにも当てはまらない」という選択肢も設けた。その結果、50項目は全て2次元構造の各カテゴリーに分布し、しかもカテゴリーごとに属する項目数は3以上であった。また、50項目に関しては判定者による分類の一致率が全て80%以上に達している。なお、周（1993）⁷⁾では収集した項目は非当事者である日本人大学院生の判定によって分類されたのに対して、本論文では当事者である日本語学校の卒業生を判定者とした。これは当事者と非当事者との間でSS概念に対する理解が異なる可能性への配慮である。

この段階では中国人就学生のSSに関する「2領域×5タイプの2次元構造」が妥当であると判断し、上記の結果に基づき、2領域×5タイプの2次元の中国人就学生用SS尺度を作成した。詳細は表2の通り

である。

3 調査2：各カテゴリーの内的整合性の検討

A 目的

調査1で作成した尺度について2領域、5タイプ及び10条件別に各カテゴリーの内的整合性を検討する。

B 方法

実施期間 2004年9月中旬～下旬

調査協力者 東京都内の日本語学校3校に在籍する中国人就学生に質問紙を配布した。回収された421人のデータのうち、10問以上連続で無回答があったデータや、規則的に回答番号に印をつけていたデータを削除し、最終的に319人のデータを分析対象とした。各日本語学校の調査実施状況は表3の通りである。

質問紙 調査1で収集したSS項目に関して、日本語学校に対して必要とするサポートの程度を4件法（4. たくさん必要とする～1. 全く必要としない）で評定させた。

C 結果

各カテゴリーの内的整合性は α 係数を算出することによって検討した。得られた α 係数は全て.606以上であり、それぞれの領域、タイプ、条件の内的整合性が裏付けられた（詳細は表2を参照）。よって調査1で作成した尺度の各カテゴリーは独立した尺度として使用可能であることが確認された。

4 考察

本論文では中国人就学生用SS尺度を作成した。具体的には、まず先行研究を参考に2次元構造を想定した。次に調査1では面接調査を行い中国人就学生のSSに関する情報を収集し、その内容を概念的に分類して2領域×5タイプの2次元SS尺度を作成した。さらに調査2では質問紙調査を行い、領域、タイプ、条件別に α 係数を計算して、それらのカテゴリーの内的整合性を確認した。

尺度の構造については、サポートの領域とタイプの2次元を使用した。前者は就学生が抱えている問題に、後者は就学生が求めているサポートの内容に立脚している。これは、サポートに対する欲求が個人の経験した特定のストレスに基づいていることから理解できる。たとえば、Cohen & McKay（1984）²⁵⁾は、

表2 中国人就学生用SS尺度及びその各カテゴリーの α 係数

		サポートの領域	
		勉学領域 $\alpha = .903$	生活領域 $\alpha = .913$
サポートのタイプ	物質的サポート $\alpha = .818$	勉学領域における物質的サポート - 日本語を学ぶための資料、参考書を貸してくれたり、譲ってくれたりする。 - 進学するための資料、参考書を貸してくれたり、譲ってくれたりする。 - 進学したい学校の学生や先生と話し合う機会や場所を設けてくれる。 - 学校を休んだ時など、授業の進み具合や宿題などについて連絡してくれる。 $\alpha = .614$	生活領域における物質的サポート - 中国語の新聞や雑誌を提供してくれる。 - 電気製品・家具を貸してくれたり、譲ってくれたりする。 - 日用品を貸してくれたり、譲ってくれたりする。 - 保証人になってくれる。 - 安い食事を提供してくれる。 - 経済的な問題で困った時に、対策を考えてくれる。 $\alpha = .801$
	心理的サポート $\alpha = .851$	勉強領域における心理的サポート - 勉強によるストレスが溜まっている時に相談に乗ってくれる。 - 勉強に自信がない時に、励ましてくれる。 - 勉強において、努力を認めてくれる。 - 勉強で分からないところを、一緒に考えてくれる。 - 進路に悩んでいる時に、相談に乗ってくれる。 $\alpha = .778$	生活領域における心理的サポート - トラブルに遭った時に、助言してくれる。 - あなたの意見を真剣に聞いたり、考えたりしてくれる。 - 差別に遭った時に、話を聞いて慰めてくれる。 - 寂しい時に、話し相手をしてくれる。 - 遊びに連れて行ってくれる。 - 日頃の生活の様子に関心を示してくれる。 $\alpha = .703$
	指導的サポート $\alpha = .771$	勉強領域における指導的サポート - 日本語学校卒業後の目標を立てるのにアドバイスしてくれる。 - 日本語学習のコースを選択するのにアドバイスをしてくれる。 - 大学や専門学校の選択を助言してくれる。 - 専門学校や大学の入学試験について指導してくれる。 - 日本語能力試験の指導をしてくれる。 $\alpha = .709$	生活領域における指導的サポート - 外国人として必要な手続きを行う時、その方法及び注意事項を教えてくれる。 - 日常生活に必要な手続きを行う時、その方法及び注意事項を教えてくれる。 - ゴミの捨て方など、日本の社会生活ルールを教えてくれる。 - 日本のマナーを教えてくれる。 - 施設の利用方法を教えてくれる。 $\alpha = .606$
	情報的サポート $\alpha = .712$	勉強領域における情報的サポート - 必要な参考書を教えてくれる。 - 地域イベントなど文化交流活動の情報を提供してくれる。 - 進学したい大学や専門学校の情報を提供してくれる。 - 学びたいことについて情報を提供してくれる。 $\alpha = .617$	生活領域における情報的サポート - 地図、路線情報を提供してくれる。 - 買い物の情報を提供してくれる。 - アルバイトの情報を提供してくれる。 - どういう行為が法律で禁止されているか教えてくれる。 $\alpha = .635$
	言語的サポート $\alpha = .796$	勉強領域における言語的サポート - 大学の入試案内など、進学のための重要な文書やお知らせを中国語に訳してくれる。 - 絵や実物やジェスチャーなどを利用して分からない言葉を教えてくれる。 - 知らない単語や外来語などを漢字で書いてくれる。 - 質問に中国語で答えてくれる。 - 日本語を添削してくれる。 - 日常会話中の日本語の間違いを指摘してくれる。 $\alpha = .664$	生活領域における言語的サポート - トラブルが起きた場合、あなたと一緒にいるいは、あなたの代わりに相手と交渉してくれる。 - 日常生活に必要な手続きの際に通訳してくれる。 - 取り扱い説明書を中国語に訳してくれる。 - あなたの代わりに日本語の電話を聞いてくれたり、かけたりしてくれる。 - 事故、病気などの緊急時に通訳してくれる。 $\alpha = .714$

表3 各日本語学校の調査実施状況のまとめ

	回収数	回収率	調査方法
A校	130名	65.0%	一斉調査
B校	200名	87.0%	一斉調査
C校	91名	91.0%	事前に質問紙を配布し、後日回収

「個人のもつ関係によって提供されたサポート資源のタイプとストレッサーによって引き起こされた対処要求とが一致するときのみ、個人のもつ対人関係はストレス緩衝として働く」ということを強調して、「ストレッサー・サポート特定性モデル」（いわゆる「マッチング・モデル」）を提唱している。つまりSSには、起っている問題（サポートの領域次元）及びその解決への要求に対応するサポートの内容（サポートのタイプ次元）の2側面がある。こう考えると2次元でSSを捉えることが自然であろう。また、前述したように本論文ではタイプ次元で収集してきたサポートの内容は想定通りに領域次元においても分類できたので、SS尺度の2次元構が妥当であると考えられる。

次に、サポートの領域次元については、「勉学」と「生活」の2つを想定した。この分類は先行研究（田中・2000）¹¹⁾ が得た結果に基づいているものであり、サポートのタイプによって収集した内容も漏れなくこの2領域に分類できたので、この方法は就学生のSSを捉えるのに適切であろう。それに加え、「勉学」と「生活」はタイプ次元に属する概念とはっきり区別でき、周（1993）⁷⁾ の問題点を改善できたと言える。

また、サポートのタイプ次元については、先行研究を参考にした5タイプとそれらに当てはまらない内容の欄を設けて就学生のSSに関する情報を収集した。調査結果では就学生の回答は全て上記の5タイプに分類でき、この分類方法で就学生のサポートの内容を十分に捉えられることが分かった。さらに、「言語的サポート」の存在は今までの研究ではまだ証明されていなかったが、本論文ではそれについての内容を収集でき、その存在はある程度実証できたと言える。

以上のような点を踏まえると、本論文で作成した中国人就学生用SS尺度は妥当であり、以下の4つの方法で利用できる。第1の使用法は、50項目総得点を重視する方法である。これはSS全体を評価する場合に使用できる。第2の使用法は、就学生が抱えている問題を重視して領域別のSSを捉える方法である。第3の使用法は、就学生が求めているサポートの内容を重視してタイプ別のSSを捉える方法である。第4の使用法は、サポートの領域とタイプをともに重視して、それらを組合せた10条件でSSを捉える方法である。つまり、本論文で作成した尺度を用いれば全体だけではなく、2領域別に、5タイプ別に、10条件別に在日中国人就学生のSSを捉えることが可能であり、多様な側面から彼らに対するSSを検討できる。

また、本論文で作成したSS尺度は一般留学生用SS

尺度と一定の相違点を持っている。例えば学習面においては、周（1993）⁷⁾ の尺度内容は研究が中心になっているのに対して、本論文の尺度内容は言語学習が中心になっている。これは日本語学校の在学期間が在日留学の初期段階であり、就学生が求めるサポートはより基本的な内容であるからと理解できよう。よって、一般留学生用SS尺度は就学生のSS測定に適用しにくく、本論文で作成した尺度は就学生へのSSを的確に把握するために必要である。

5 今後の課題

本論文では2領域×5タイプの2次元構を使用した。しかしその構造は単に理論的な構成及び10人の就学生の分類によるものなので、さらに検討する余地が残っている。例えば、浦（1992）²⁶⁾ ではSSについては「道具的サポート」と「社会情緒的サポート」の2種類（タイプ）があると述べている。これに対して本論文では5タイプを取り上げた。これらのサポートのタイプ、特に今回新たに取り上げた言語的タイプは他のサポートと弁別し、独立に存在できるかという検証が必要であると考えられる。今後、因子分析等の標準的な分析手続きを使用して、本論文で使った尺度の構造をさらに検討したい。

また、現在日本では就学生に対するSS研究はまだまだ少なく、検討すべき課題が多くある。特に、就学生の心身健康状態を反映する異文化適応と、彼らへのSSとの関連についての検討は、日本語学校が就学生の心身健康を管理する際に大変意義があると考えられ、今後取り組んでいきたい。

（指導教官 市川伸一教授）

引用文献

- 1) 日本語学校（日本語教育機関）で学ぶ外国人学生の在留の資格はほとんど就学となっているが、少数の学生は「留学ビザ」を持っている。このような学生は本論文の対象外とした。
- 2) 財団法人日本語教育振興協会 平成19年12月 日本語教育機関の概況。
- 3) 岡益巳・深田博己 1994 中国人留学生に関する実態調査 岡山大学経済学会雑誌, 27 (3), 493-523.
- 4) 加賀美常美代 1994 異文化接触における不満の決定要因—中国人の就学生の場合— 異文化間教育, 8号, 117-126.
- 5) 嶋信宏 1990 大学生におけるソーシャルサポートの日常生活ストレスに対する効果 社会心理学研究, 7 (1), 45-53.
- 6) 久田満・千田茂博・箕川雅博 1989 学生用ソーシャル・サポート尺度作成の試み (1) 日本社会心理学会第30回大会発表論文

集, 143-144.

- 7) 周玉慧 1993 在日中国系留学生用ソーシャル・サポート尺度作成の試み 社会心理学研究, 第8巻, 第3号, 235-245.
- 8) 上原麻子 1988 留学生の異文化適応 言語習得及び異文化適応の理論的・実践的研究 広島大学教育学部日本語教科・留学生日本語教育(編), 111-124.
- 9) 姚霞玲・松原達哉 1990 留学生のストレスに関する研究(1) —生活ストレスを中心に— 学生相談研究, 11, 1-11.
- 10) 山崎瑞紀 1994 アジア系就学生の対日イメージ形成に関する因果モデルの検討(資料) 教育心理学研究, 42(4), 442-447.
- 11) 田中共子 2000 留学生のソーシャル・ネットワークとソーシャル・スキル ナカニシヤ
- 12) Caplan, G. 1974 Support systems and community mental health. New York: Behavioral Publications.
- 13) Cobb, S. 1976 Social support as a moderator of life stress. Psychosomatic Medicine, 38, 300-314.
- 14) Kahn, R. L. & Antonucci, T. C. 1980 Convoys over the life-course: Attachment, roles, and social support. In P.B. Baltes & O.G. Brim (Eds.), Life-span development and behavior. Vol.3. (pp.253-286). New York: Academic Press.
- 15) Silver, R. L. & Wortman, C. B. 1980 Coping with undesirable life events. In J. Garber & M. Seligman (Eds.), Human helplessness (pp.179-340). New York: Academic Press.
- 16) House, J. S. 1981 Work stress and social support. Reading, MA: Addison-Wesley.
- 17) Shumaker, S. A. & Brownell, A. 1984 Toward a theory of social support: Closing conceptual gaps. Journal of Social Issues, 40, 11-36.
- 18) Barrera, M., Jr. 1986 Distinction between social support concepts, measures, and models. American Journal of Community Psychology, 14, 413-445.
- 19) 浦光博・南隆男 1987 ソーシャル・サポート研究の予備的検討(2) —日本社会心理学会第28回大会発表論文集, 127.
- 20) Hobfoll, S. E. & Stokes, J. P. 1988 The processes and mechanics of social support. In S. Duck (Ed.), Handbook of personal relationship (pp.497-517). New York: Wiley.
- 21) Vaux, A. 1988 Social Support: Theory, Research, and Intervention. New York: Praeger.
- 22) 和田実 1988 ソーシャル・サポートに関する一研究 東京学芸大学紀要, 1 部門, 40, 23-38.
- 23) 嶋信宏 1991 大学生のソーシャル・サポート・ネットワークの測定に関する一研究 教育心理学研究, 39, 440-447.
- 24) 音山若穂 1996 心理的ストレス反応に対するソーシャル・サポートの緩衝効果—教育実習生のストレスに関する一研究— 早稲田大学大学院文学研究科紀要, 第1分冊, 41, 29-41.
- 25) Cohen, S., & McKay, G., 1984 Social support, stress and the buffering hypothesis: An empirical review and theoretical analysis. In A. Baum, J. Singer, & S. Taylor (Eds.), Handbook of psychology and psychology and health, 4. Erlbaum, 253-267.
- 26) 浦光博 1992 支えあう人と人 ソーシャル・サポートの社会心理学 安藤清志・松井(編) セレクション社会心理学—8 サイエンス社

謝辞

本論文は、東京大学大学院教育学研究科に提出した修士論文(2004年度)の一部をまとめなおしたものです。英文要旨及び日本語での執筆にあたり、東京大学留学生センターのボランティアの浅川純一様をはじめ、東京大学大学院教育学研究科の今泉友里様、角能様、加島大輔様、関根宏朗様、佐藤昭宏様、山本一生様、米津美香様、Jeremy Rappleye 様に丁寧な校閲をいただきました。心よりお礼を申し上げます。